

大学英語クラスにおける映画吹き替えタスクの試み

Using a Film-dubbing Project in a College English Class

大 城 明 子
Akiko Oshiro

Abstract

The purpose of this study is to report a film-dubbing project in a college English class and to examine its effects on students. As a final task of a basic communication class, 39 students experienced a film-dubbing task. After that, they answered to a questionnaire consisting of 8 questions about their preparation and comments on this task.

The results of the questionnaire have three points. First, learners who made both individual and group practice frequently achieved well in their presentations. Secondly, they realized natural speed and super-segmental pronunciation of authentic English language through this project. Thirdly, most of them showed favors to adopt a film-dubbing activity for their speaking practice of English by themselves.

In summary, a film-dubbing project has positive effects on learners of English and can be a useful activity for learning English.

0 はじめに

筆者は、本学において基礎的なリスニングおよびスピーキング力の養成を目的とする科目の英語Ⅰ・Ⅱ（両科目とも同じ受講生）を担当している。年度初めの英語Ⅰで行うアンケートの自由記述欄には、クラスの数人が必ず、「洋画の英語をわかるようになりたい」、「映画で英語を学びたい」と映画を用いての英語学習の希望を書いている。それをうけて、筆者は英語リスニングおよび内容理解を中心に、映画を副教材として用いた。取り上げる映画は、学習者のレベルに適した親しみやすい内容のものを取り上げてきた。（「となりのトトロ（英語音声兼日本語字幕）」、「オズの魔法使い」、「ユー・ガット・メール」等）映画の中の日常の様々な表現のリスニングとその理解を目指すとともに、洋画の場合には描かれている異文化の説明をするなどのインプット中心の英語学習となっていた。

それを踏まえ、映画による英語学習の次の段階として行ったのが、本稿で報告する「映画英語吹き替え」活動である。リスニング（英語音声で英語と日本語字幕利用）によりインプットを行った上で、登場人物の台詞を自分の言葉のように発話する英語吹き替えのアウトプット作業を行うものである。学生は好みの映画の場面を選択し、それを録音したラボ室音声ソフトを用いて英語アフレコの練習を重ね、発表ではその動画場面を流しながら登場人物になりきってしゃべるタスクに挑んだ。

本稿では、合計8カ月に及ぶ英語Ⅰ・Ⅱの英語基礎コミュニケーション学習の総仕上げとして行った「映画吹き替えタスク」の取り組みを報告するとともに、本タスク発表終了後に実施した学生アンケート結果の分析を通して、映画を用いて学習する一方法の「映画吹き替えタスク」について検討する。

1. 研究背景

現在、DVD 映画は学習者の英語学習への動機づけを高める学習教材として多用されている。それに伴い、映画を活用して行う英語教育の方法とその学習効果について、多くのレスンプランや事例報告ならびに研究がなされている。以下では、その中から映画の英語教育への活用の意義について論じている先行文献を取り上げ、映画英語教育のなかでとりわけ盛んなリスニング指導の研究や報告を紹介し、さらには、現在大きな問題となっている、大学生の英語学力と英語学習意欲の低下に対応する映画を駆使した英語教育について述べる。最後に、本稿と同じ学習方法に類する映画を用いた英語スピーキングの実践や「映画の吹き替え授業」から明らかにされてきた映画に内包される特質についての議論をふまえ、本稿の研究背景および動機を示す。

映画による英語学習の可能性については、Yamanaka (2002) が映画は英語のオーセンティックな英語教材としてあらゆる技能を訓練できると論じている。また熊抱 (2003) は、映画を通しての言語的、非言語的要素のみならず、言語の文化的・歴史的背景や習慣を学ぶ意義を展開している。さらに瀧口 (2007) は、映画における音声と映像の一体化が観る者への大きなインパクトを与え、映画のなかの「ことば」への深い理解を可能にすると説いている。

映画による英語教育への多様な活用のなかでも、特にリスニング能力の向上を目的とした実践研究が多く見られる。例えば、荻野 (2004) は、五つの段階をふんで、リスニングとともに包括的な映画理解を高めるクラスデザインを提示している。はじめに、講師が語彙および表現解説や筋書きの紹介を行う。それをうけて第二段階では、学習者は英語字幕付き映画を、事前に得た言語および背景知識を映画の音声と照らし合わせながらリスニングを行うことができる。第二段階では、内容に関する問題のみを解き、内容全体の理解を定着させる。そして第四段階では、字幕なしの映画を鑑賞し、学習者は最後の段階として多項式選択問題や語彙問題に取り組みながら映画でのリスニングの振り返りをし、リスニング力を強化させる構成となっている。学習者が文字の書記言語と音、画像を統合させて映画を理解し、英語字幕付きおよび字幕なしのそれぞれの映画視聴後に、個々の段階で求められる修得内容の問題を演習することによって、リスニング力を向上させていくレスンプランは、まさに上記の瀧口 (2007) の言及する映画での英語学習の特性を生かしているものである。

同様に、リスニング理解について、植松 (2004) は初級、中級レベルの大学生を対象とした DVD 映画教材の効果的提示方策に関わる英語字幕利用の実験を行っている。英語字幕の映画視聴を半年間にわたって経験した英語学習者は、内容理解のための訓練を無意識にうけることで聴解力テストの成績をあげることができたと報告している。

また、角山 (2008) は、映画のリスニング理解を目的とするディクテーション演習の有効性を日本語字幕の有無の違いから探った。日本語字幕を提示しない映画視聴におけるディクテーション演習は音声認識に関するリスニング能力の向上をもたらした。しかしながら、日本語字幕を提示すると、学習者への映画教材に対する英語の難度を下げる効力はあるが、内容理解への聞き取り意欲を低下させ、それがディクテーション演習の結果に繋がらないこと

が明らかになった。よって、映画英語の難解さを日本語字幕を使用することで解決しようするのは、必ずしも英語リスニング能力の到達に結びつくわけではないと結論づけている。

最近の英語教育の映画活用の傾向として、学習者の英語学力および学習意欲の低下に対応する実践および研究が目立ってきた。曾我（2006）は、大学一般教養英語科目再履修クラスでの映画教材を主とした授業を報告している。再履修学習者の英語学習に対する心理的な壁を低くし、英語学習の動機付けを持たせることを目標に、英語の4技能の作業を満遍なく行わせるレッスンプランを実行した。映画の脚本ト書きの読解を語彙や文法、構文の理解を図りながら丁寧に指導し、該当場面の映像をそのつど観て確認を行ったり、学生個々のペースで映画台詞を書き取り、それをCALL教室のPCソフトの再生速度調節機能を用いて発音練習をするなどクラス全体と個人学習の緩急をつけた学習の効果を報告している。また、Mebed（2007）は、英語授業での映画活用は英語力中級以上の学習者を対象としたものだけではなく、英語学力の低い大学生の英語授業においても、映画教材の導入は十分に有効であることを自らの実践に基づき主張している。初級レベルの英語クラスで、日本語字幕の洋画ビデオを視聴した学習者に、英語による映画内容の質問を行い、それに対してスピーキングとライティングで答える訓練をさせたり、印象に残る場面の台詞をロールプレイングで発表させた。能動的な英語学習の体験で英語修得感が高まり、クラス終了前に行ったアンケート結果ではクラス受講に関する満足を示した学生はクラス全体の8割強を占めるに至ったとしている。一方、カレイラ（2009）は、英語学習に意欲を持たない英語学習者が、映画のスク립トを教材に用いて語彙や表現を調べ、映画のあらすじを理解するポートフォリオ活動の指導について報告している。地道な個人の調べ作業が主となるポートフォリオを行った後とその前をアンケートによって比較すると、学習者の英語学習への興味を表す「注意」、個人の英語学習への「自信」と「満足感」において伸びがみられた。これは、学習者が興味のもてる映画教材を用いることで、教師の励ましや学習取り組みのアドバイス等の支援を受けながら、積み上げ型の英語学習を自主的に進めていく学習指向性の変化を明示していると考えられる。

ところで、本稿の「映画の吹き替え」に関連するスピーキング分野についての実践や研究は以下の二つがある。鈴木（2007）は、大学の英語授業において映画のスク립ト利用による発話のパフォーマンスを行う一連の流れをデザインしている。初めに、クラス内でみた映画に興味をもった場面のスク립トを学習者が選び、その内容理解と音読練習を丁寧に行う。その次にはスク립ト内の登場人物や内容を学習者個々の情報に書き換えることで学習者が自分のことを表現する内容のコミュニケーション活動へと引き上げる。さらに、そのスク립トのパフォーマンスをCDに録音し、学習を昇華させている。学習者は、最終段階のパフォーマンス録音にいたるまでに英語の4技能の訓練をするとともに、発表する場面の内容と言葉を深く理解し内面化することができるとしている。塚本（2003）は、本稿の「映画吹き替え」に共通する実践をもとに、映画を用いた音声メディアの活用について考察している。英語をコミュニケーションのツールとして用いる目的にしている日本の英語教育は、今

後、従来の文字メディアでの学習に偏った体制から音声メディアおよび映像メディアを利用した「聴く」と「話す」学習への移行がおきていると指摘している。その際に、音声メディアに内包されている発音、リズム、イントネーションなどの言語知識と音声情報の感知能力およびスキル修得の必要性を説いている。音声、文字および映像メディアを含む映画を教材として利用するにあたっては、授業実践者はこの三つのメディアの特徴および特性への理解と活用を図る重要性があると言及している。

以上にあげた先行研究および実践報告が示すように、映画のもつ多様な特性を共通の認識とした上で、英語教育への活用が求められている。本稿では塚本（2003）の「映画吹き替え」授業の報告とその考察を参考にしながら、筆者が講義で行ったスピーキングとしての「映画吹き替えタスク」の実践報告と学習者への影響に注目し、その可能性について検討する。

2 研究の目的

本稿の研究の目的は、「映画吹き替えタスク」の実践を通して次の三つを探ることである。

- 1 授業で学習したリスニング力とスピーキング力は、「映画吹き替えタスク」で生かすことができたのか？
- 2 「映画吹き替えタスク」に参加した学生に及ぼす影響は何か？
- 3 「映画吹き替えタスク」は今後の英語教育の実践に生かすことが可能か？

1については、「映画吹き替えタスク」を実施する前の7ヶ月間に、受講生はリスニング力の基盤となる発音（音声変化も含む）、リズム、イントネーションなどの英語音声の知識を学習し、リスニング力をつけてきた。また、スピーキング力については、先のリスニング力のスキルを、教科書のロールプレイ発表や学習者が自ら作り上げた英語劇の発表による経験とその実践で養成した。それらの力は、「映画吹き替えタスク」で生かすことができたのかを考察する。筆者は、「映画吹き替えタスク」以前に、学習者は十分にリスニングとスピーキングの知識の習得と練習を行ってきたので、その力は生かされてくるものだと予想する。ただし、映画の本物の英語の早さや間合いは、日本語学習者を考慮した英語教科書には存在せず、それらのことを授業で学び知識として持っていたとしても、学習者の理解というインプットと発話としてのアウトプットでは、それらの知識を生かすまでの領域には達するか否かは疑問である。

次の2は、「映画吹き替えタスク」に参加した学生へのアンケート回答を分析することで、その実践の影響について探ることにする。影響については、良い点と悪い点の二極性もあげられるであろうし、学習者が「映画吹き替えタスク」の作業を行う中で言語知識と言語運用や心理面での影響など、様々な観点からそれらを検討することは、「映画吹き替え」の実践と映画活用の特性を把握する意味で大切であると考えられる。

最後に3については、上の1と2を受けて「映画吹き替えタスク」が英語学習の有効な方

法となりうるのかを総括的に検討したい。学生へのアンケート結果のみの判断だけでなく、言語習得論の観点や英語授業を実践する立場から「映画吹き替えタスク」で求められる力やそれを実施するにあたっての条件などを考えてみたい。

3 研究方法

3-1 被験者

沖縄国際大学1年次で必修科目である英語ⅠとⅡ（筆者の担当クラス）を続けて履修した学生39名が参加した。学生の専門は福祉系または社会系である。英語のレベルは英検3級前後であり、英語圏への2週間研修を経験した学生が二人いたほかは、日常で英語を使用する機会はほとんど無い。全員が英語による映画吹き替えの経験はなかった。本稿では、被験者を学習者と記述する。

3-2 「英語吹き替えタスク」の流れ

英語Ⅰおよび英語Ⅱクラスの総括プロジェクトとして「映画吹き替えタスク」を行った。それ以前は、上記の研究の目的の1に示したように、リスニングやスピーキングの基礎的な知識と訓練をつんだ。

英語Ⅱの講義が終了する2ヶ月半前から、講師による「映画吹き替えタスク」の内容説明を行うことで受講生の心積もりを持たせるように心がけた。洋画の日本語吹き替えではなく、英語の吹き替えであり、登場人物になりきることをしっかりと伝えた上で、下の手順で「映画吹き替えタスク」に取り組んだ。

1. クラスで2～3名のグループをつくり、好きな映画のうちグループでアフレコができるような場面もしくは箇所を選び出す。（時期：発表2ヶ月前）
場面選定上の注意
 - 1) 2～3分未満であること
 - 2) グループメンバーがそれぞれ3回以上の台詞があること
 - 3) 難しい表現や内容は選ばないこと（内容の理解や発話に苦労したりする可能性が高くなるのを避けるため）
2. 発表に用いる箇所のメモを添付したDVDを講師に預ける（講師は、CALL教室の音声学習用のソフトにその箇所を録音する。学習者はそのソフト操作は、それまでの授業で頻繁に使用しており、速度調節や録音機能などを用いて吹き替えの練習ができる。）
（時期：発表1ヶ月半前）
3. 発表までの一ヶ月半は、クラスの毎回後半10分を「映画吹き替えタスク」の準備時間として設ける。ソフトテレコでの練習（週一回のラボ室のみに限定）や講師への質問時間とし、講師が指導するのではなく学生が主体的に準備を行うようにすすめる。
4. 18グループを2回にわけて発表会を行う。CALL室のプロジェクターを利用し、音声を絞って映像のみを流しながら発表をする。また、発表者以外の聴衆は、発表を行うまで

の準備の5分ほどを利用して、2で述べたソフトの音声を聞き、各発表グループの映画吹き替えの内容を把握する。

5. 発表をおえた各グループは、その直後にアンケートに答える。

3-2 調査方法

研究の調査としては、筆者による「映画英語吹き替えタスク」に参加した学生の観察とともに、アンケートを行った。アンケートは、8つの質問から構成されるが、Q 5とQ 6についてはQ 2、Q 3、Q 4と質問内容と答えが重複しているため結果と分析を省くことにする。

アンケート内容： 次の質問について答えてください。

Q 1. 発表前の準備について

1-1 DVD を用いて練習を行ったのは何回ですか？

1-2 ソフトテレコを使用して練習を行ったのは何回ですか？

1-3 暗記をかねた発話練習は何回行いましたか？

Q 2. 発音の点できづいたことがあれば自由に書いてください。

Q 3. 難しかったことがあれば自由に書いてください。

Q 4. 「映画吹き替えタスク」で学んだことがあれば自由に書いてください。

Q 5. 「映画吹き替えタスク」をとおして英語における自分の強い点について自由に書いてください。

Q 6. 「映画吹き替えタスク」をとおして英語における自分の弱い点について自由に書いてください。

Q 7. 今後、映画のアフレコを英語学習として行ってみたいですか？

次の5項目から選んでください。

1 絶対に行いたくない / 2 あまり行いたくない

3 どちらでもない / 4 どちらかというに行いたい

5 絶対に行いたい

Q 8. 「映画吹き替えタスク」はあなたのスピーキング力向上に役立ちましたか？ 次の5項目から判断してください。

1 全く役にたっていない / 2 あまり役に立っていない

3 どちらともいえない / 4 ほぼ役に立った / 5 完全に役にたった

4 結果分析と考察

4-1 発表の様子から

発表では、4グループが吹き替えの発表をほぼ完全にやり遂げており、10グループは6割から7割の出来で、その他のグループは映像とほとんどがかみ合わない発表となっていた。ほぼ完全にやり遂げたグループは、映像を見ながら個々の人物の口の開きに合わせて声を大

きく出して発話していた。台詞を完全に覚えて、登場人物の感情や場面設定を把握して発表していたのである。6～7割の達成となったグループに関しては、発音はよかったものの台詞のメモと映像を交互に見ることが多いために映像での発話の速さに合わせられない様子が目立った。その他のグループは、映像と合わない速さの発話になっており、感情移入がなされていないなどの準備不足が顕著に現われていた。

発表から観察された発表者の様子は、塚本（2003 p.9）の2タイプのグループについての記述の「聞きとって作った文字メディアとなった台本をよむことに集中するタイプ、二つ目が聞こえた音声を中心に吹き替えの練習をするグループ」を想起させられる。本稿でのタスクで成功をおさめた4グループは、塚本（2003）のさすところの後者のグループではないかと考える。映像にあわせた音声となる「映画吹き替えタスク」は台詞の文字を追いかけるだけでは達成できない。文字メディアに偏った学習で練習を行っても、生の英語である映画の吹き替えという発話では、音声および映像による情報の把握と処理が欠けているため、本番の発表は上手く行えなかったと推測される。

4-2 アンケートの結果から

次にアンケート結果の円グラフを提示しながら、分析する。

Q 1 では、発表前の準備について次の3つの質問に対し表1の結果となった。

質問	平均回数	最小回数	最大回数
1-1 DVDを用いて練習を行ったのは何回ですか？	5.2回	0回	20回
1-2 ソフトテレコを使用して練習を行ったのは何回ですか？	5.4回	0回	20回
1-3 暗記をかねた発話練習は何回行いましたか？	10.2回	0回	50回

表1 Q 1 の各3質問に対する結果

全体を概観して、DVDとソフトテレコ利用の練習回数が少ないのは、4-1 であげた映像と音声による練習が欠けている点を示すものと考えられる。

台詞の暗記とともに、その先のDVDやソフトテレコの練習によって、発話の速さ、間合い、感情移入などの実際のスピーキングの訓練と修得が可能になるのである。それらの段階に及ばなかった被験者が多くいたことは、十分な準備をつんでいなかったことを示すものだろう。

次に、Q 2 の結果（図 1）を参考に考察する。

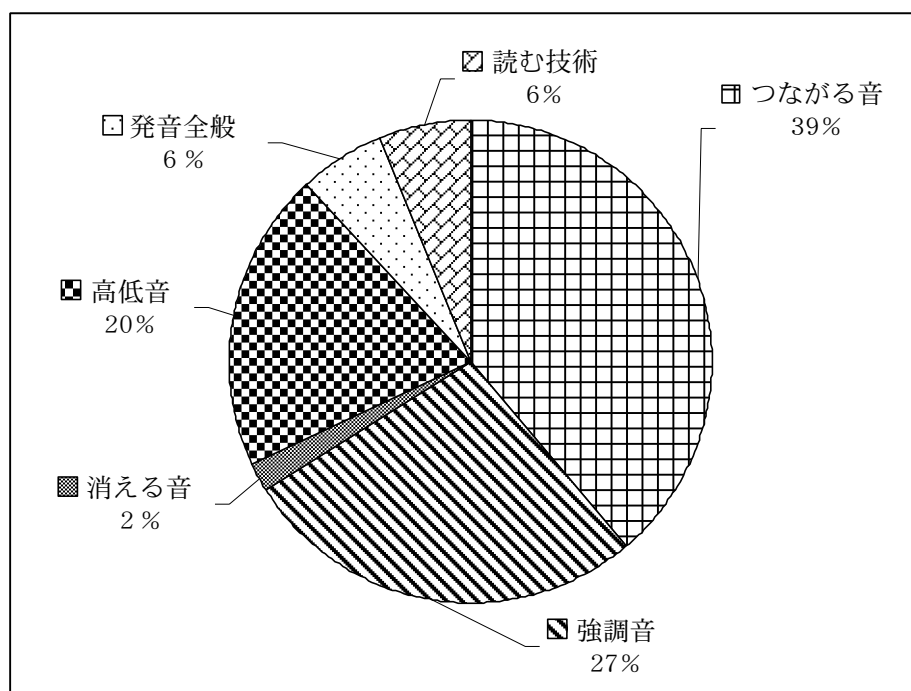


図1 「Q2 発音で気づいたことは何ですか？」の結果

Q2では、英語音声の特性である「つながる音、強調音、高低音」を、「映画吹き替えタスク」を通して気づいたと答えており、これらの合計は86%に及んでいる。付録2での自由記述回答の抜粋と照らし合わせると、英語の発音をリスニングとスピーキングの両面から実感した様子が伺える。英語学習者が本物の英語にふれて、それに近づこうとするとときに学んだこれらの音声知識は、講義での説明で得る知識よりもさらに実感として経験することで学習者の内在化に至ることが可能だと考える。

次の図2のQ3「映画吹き替え」における難しさについての結果である。回答は全てスピーキングのことであり、大まかにわけると英語音声のメディアに関する「早くしゃべること、つなぎ音」と、吹き替えに必要な技術的な「タイミング、感情移入」との二つに分けられる。（「長い台詞」はどちらの部類にも入るとみなされるので、ここでは論じない。）英語教材の音声は学習者むけに速度を落としているのが一般的であり、講師（筆者）は英語クラスでの発表においても速さについての注意はあまり行わない。そのため、映画で実際の英語の速さをリスニングし、アウトプットする段階ではその速さに追いつけない難しさを実感したと考えられる。また、英語独特の繋ぎ音についても真似て発音することは、日本人学習者の苦手な部分である。一方、吹き替えの技術的な難しさの「タイミング」や「感情移入」は、映像を何度もみながらその中の登場人物の把握およびパフォーマンス性が求められ、通常のスピー

キングにはない難度の高さの点で、「映画吹き替え」においての壁になっている。

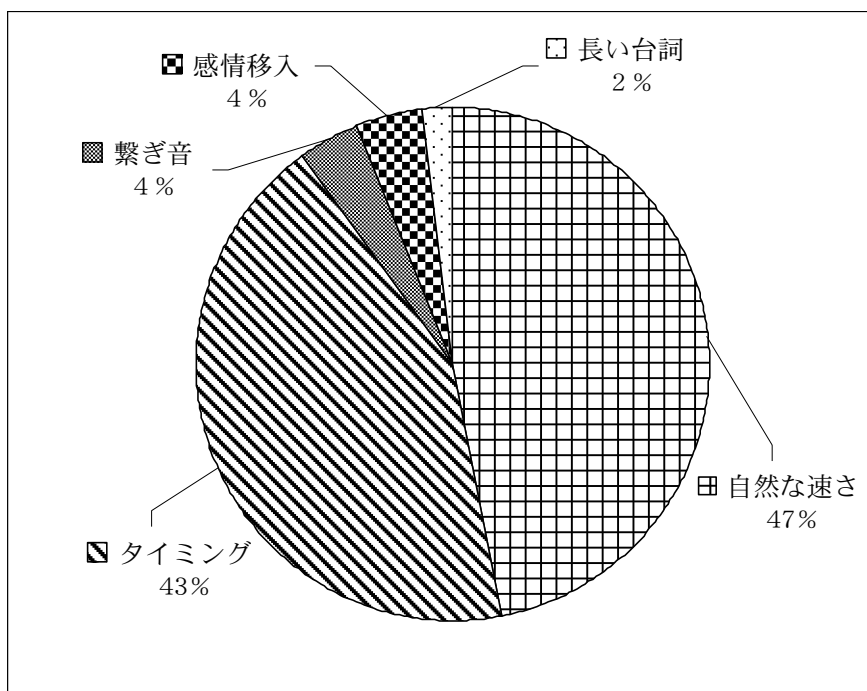


図2 「Q3 難しかったことがあれば自由に書いてください」の結果

次のQ4では「映画吹き替えタスク」で学んだ点についての回答であるが、以下の二つに分類できた。

- 1 英語の特質やクラスで履修した英語音声変化現象の再確認
- 2 生の英語に触れることの大切さについての実感と発見

1については、先の質問に対する答えと同様のものである。特筆することとしては、「英語の発音をするときには舌の使い方が大切だと思った」や「強弱により文の意味の捉え方が違ってくる」があった。発音指導では、調音点について単語ごとの舌の位置について注意することはあっても、それを総括して一文メッセージとして学習者にわかりやすく提示することはなかった。この欠序は講師（筆者）の反省を促すものである。また、後者の音の強弱が文の意味と関連していることについて、映画の文字メディアと音声メディアの合致によって発見されている点であり、映画を通して学ぶ上で見逃してはならない点であろう。

2では、多くの気づきがみられた（付録3参照）。その中の一部に「沢山口にだして発音することで、始めは聞き取れなかった音も聞きとれるようになり、次第にスピーキングのスピードも上がった」という記述があった。映画の登場人物の発音を何度もまねることで、自然に英語の音声変化のパターンを理解し、それがリスニング向上とスピーキングの速さへと導いていると考えられる。これは、タスクという強制的な「映画吹き替え」を準備するなか

で、筆者が意図した学習段階のステップ（「0 はじめに」に提示）を踏んだ学習者の声であると考え。また、映画で英語を学ぶ意義や楽しさの記述（付録3のa、b、c）もみられた。映画吹き替えタスク準備を進めるなかで感じたこれらの映画活用の学習体感は、学習者が個人で楽しみをもって英語を学ぶ際の足がかりになりうる。

アンケートのQ7に対する結果は次の図3である。

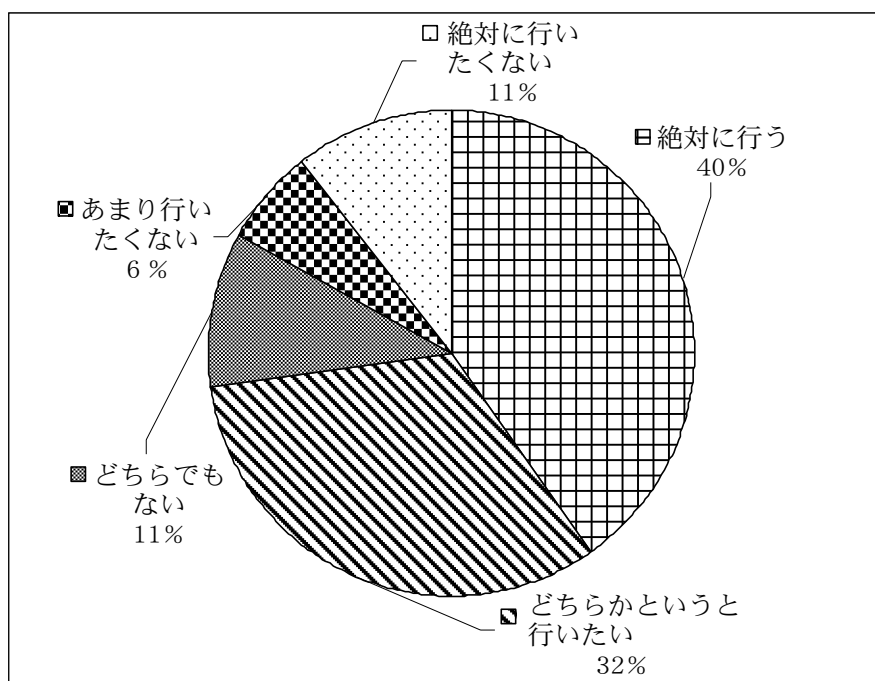


図3 「Q7 今後、映画のアフレコ（英語の吹き替え）を英語学習として行ってみたいですか？」の結果

今後の英語学習方法としての映画アフレコの意思を問う質問に対し、積極的な意思をもつ被験者が72%にも上っている。被験者全員が始めて英語吹き替えを経験した中で、好意的な印象を持ったことを明示している。その理由については、アンケートで訊ねてはいないため論じられないが、「映画吹き替えタスク」が学習者に英語力、英語学習体感、英語学習の動機付け等のなんらかを与えた学習方法であったことは間違いないであろう。逆に、否定的な意思を答えた学習者の理由を調べることで、何が映画活用の英語学習への積極さを導くポイントになるのかを明らかにすることができるとも考えられる。

最後に、アンケート項目 Q 8 の下の結果について検討する。

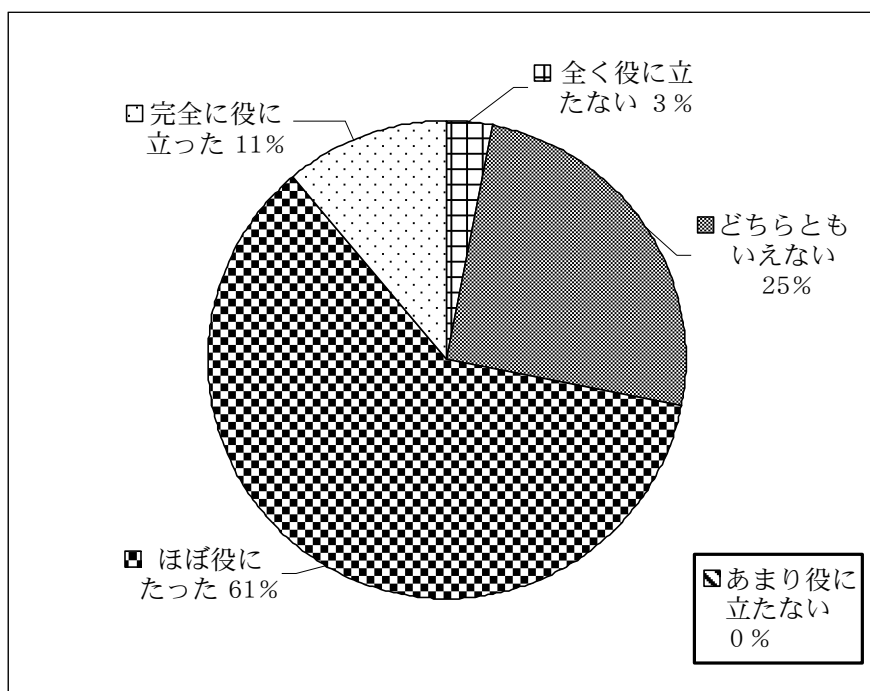


図4 「Q 8 「映画吹き替えタスク」はあなたのスピーキング力向上に役立ちましたか？」の結果

スピーキング力の向上に役立ったと回答したのは全体の72%になり、「映画吹き替えタスク」がスピーキング演習として学習者に認識されていることを表した結果となった。「映画吹き替え」が学習者に好意的にとらえられたことで、「映画吹き替え」が英語教授のスピーキング練習の一つとしてあげても問題はない。ただ、この項目でも「どちらともいえない」、また「全く役に立たない」とする声があることは、たとえ少数であっても受け止めて、その理由を探ることによって「映画吹き替え」のスピーキング活動についての学習者の心理的な否定の心情を解消や肯定的な態度への移行を導くものである。

5 結論

4 の結果と考察から、研究目的についての結論は次のように考えられる。

まず、目的1の「授業で学習したリスニング力とスピーキング力は、「映画吹き替えタスク」で生かすことができたのか？」については、アンケートのQ 2とQ 4の回答に基づくと、必ずしも講義で学んだことが、「映画吹き替えタスク」でいかされているか否かの判断はできない。その理由は、英語音声の特質である項目を講義で理解しリスニングやスピーキングの練習で修得したはずなのに、Q 2やQ 4の記述に、それらが難しいと感じたり、新しい発見として記述していることによる。但し、映画というオーセンティックな教材を用いた場合

と、普段の講義テキストの音声を中心とした用いられる英語の乖離が、学習者の上のような印象をもたらしたとも考えることは否めない。よって、この問いに対する答えは、明らかにすることはできない。

次に、2の「映画吹き替えタスク」に参加した学生に及ぼす影響は何か？」であるが、アンケートQ4にみられたように、映画という生の英語に近づく作業を通して実際の英語音声への意識づけの影響をあげることができる。

そして、3の「映画吹き替えタスク」は今後の英語教育の実践に生かすことが可能か？」に対する答えは、可能であると結論づける。学習者の観察やアンケート全体の回答から、英語学習者は「映画吹き替えタスク」によって様々な学びをえており、それが知識だけでなく学習体感と修得にいたる例がみられる点で、「映画吹き替え（タスク）」は英語教育の実践として役立つものだと考える。

以上、「映画吹き替えタスク」の実践と結論を述べた。学習者が主体的に取り組んで自ら学ぶ「映画吹き替えタスク」の目的は、本取り組みで達成されたと考えられる。しかしその反面、本タスクで上手くいかなかったグループおよび学習者をかんがみる必要がある。これらのグループや学習者に対しての理解と把握、そして講師（筆者）の支援の有り様が「映画吹き替えタスク」の結果を変えることは想像に難くない。今後は、その点を考慮した授業実践者の意識が「映画吹き替え」の効果的な英語学習への実践の鍵となるであろう。

註

本研究は、平成19年度第13回映画英語教育学会研究大会において発表した内容に加筆と修正を加えたものである。

参考文献

- 角山照彦. (2008). 「映画を活用したディクテーション演習の効果について－英語教育における日本語字幕の影響の有無と今後の課題－」.『英米文化』, 第38号, 広島国際大学. 95-115.
- カイレラ松崎順子. (2009). 「映画のスク립トを教材として取り入れた英語の授業の事例報告」.『映画英語教育研究』, 第14号, 61-71.
- 熊抱ゆかり. (2003). 「映画英語教育におけるさまざまな可能性」.『福岡大学人文論叢』, 35巻3号, 1121-1134.
- Mebed, S. (2007). Using Film in Low Level Non-major Oral Communication Courses. *Bulletin of Tokai Gakuen University*, 11, 99-108.
- 荻野浩子. (2001). 「映画を通じて育成する口語英語聴解力」.『大学英語教育学会第40回大会要綱』, 218-219.
- 曾我直隆. (2006). 「再履修生の学習意欲を高める授業：映画を用いたCALL」.『大学英語教育学会第45回大会要綱』, 89-90.
- 鈴木政浩. (2007). 「ダイアログ練習は、人物になりきって」.『英語教育』, 第56巻, 第9号, 大

修館書店, 14-15.

瀧口優. (2007). 「映画英語教育のすすめと課題」. 『英語教育』, 第56巻, 第9号, 大修館書店, 10-11.

塚本美恵子. (2003). 「『映画の吹き替え授業』から見た発話課題－音声メディアを活用した発話授業を成功させるために－」. 『映画英語教育研究』, 第8号, 83-16.

植松茂男. (2004). 「DVD 映画教材利用時の英語字幕が英語学習に与える影響について」. 『メディア教育研究』, 第1号, 107-114.

Yamanaka, M. (2002) The use of Movies in EFL Tuition. *Bulletin of Gifu Women's University*, 32, 43-49

付録1

18発表グループが選んだ映画の内容 () は複数グループの場合の表示
シュレック、くまのプーさん、ターミナル、パイレーツカリビアン (3)
ラストサムライ、ハリーポッター (2)、奥様は魔女、ピーターパン、
ファインディングニモ (2)、トイストーリー、ミセスダウト、
キャッチ ミー イフ ユーキャン、天空の城ラピュタ、スペース カウボーイ

付録2 アンケート Q 2 に対する自由記述回答 (一部抜粋)

<つながる音について>

- a 英語はつながって発音するところが多いので流れるように聞こえるのだと思った
- b 単語をつなげて言うことで相手に聞きやすくなり早く言えるようになる

<強弱音について>

- c 強弱があるからこそ、文の意味だけでなく感情が入り、より伝わりやすくなっている
- d 意味を強調する語は音を高くし強く発音することを練習しながら学んだ

<消える音>

- e 聞こえない音が多いこと

<読む技術>

- f 単語をそのまま発音したら片言のようになってしまった

付録3 アンケート Q 4 に対する自由記述回答 (一部抜粋)

- a この活動をしてみて、以外と自分達の知っている単語が沢山出てきていることがわかり、より英語に親しみがもてたこと

- b この「映画吹き替えタスク」はとても楽しい、面白い！役になりきって発音することで英語も覚えられるから良い
- c 自分で題材を決めて取り組む作業は、初めてですごく新鮮だった